東大教師 青春の一冊

東京大学新聞社 編

悩める青年達におくる!

東大教師の人生を変えた本

東大教師も悩んでいた——。
そんなときに出会った、
人生の道しるべとなった本を紹介。

8101-01011

信山社
SHINZANSHA

定価:本体82[illegible]円(税[illegible]

30

進取の学問へのいざない

『ソロモンの指環』

コンラート・ローレンツ（日高敏隆訳）

（早川書房、一九六三年）

北本 勝ひこ（農学生命科学研究科教授）

駒場に入学して一カ月ほどたったころ、駒場自治会によるストが始まった。きっかけは、医学部の学生の不当処分撤回を求めるものだったと思う。当時、大学で授業料値上げ反対などのストは珍しいことではなく、通常長くても一週間程度で講義は再開されるのが常だった。入学後の緊張感から疲れが出るころで、クラスの雰囲気はちょうどいい中休みといった感じだった。ところが、このストはいつの間にか無期限ストという形に変わり、夏休みになっても講義再開の兆しは見られなかった。八月になり大学側最終案が提示されたが、一方的な総長告示という形がまたもや学生の反発を買い、さらにストは続いて、翌年の一九六九年は入学試験が実施されないという歴史的事態となった。そのため、約一年間は毎日、大学に来てもクラス討論と生物学研究会（生研）というサークル活動にほとんどの時間を費やした。

秋になると、講義内容にも学生の要望を取り入れた新しい自由ゼミなるものが登場した。その中に、東京農工大の若き教授だった日高敏隆先生のゼミがあり、早速、生研の友人と参加した。谷川岳や清澄山に泊まりがけで出かけて、昼は山で出会う虫、鳥、動物などの自然に触れながらの日高先生の講義、夜はお酒を飲みながら動物行動学の話を聞くといった楽しいゼミであった。この本を読むきっかけは、このとき日高先生に巡り会ったからだ。

この本の題名は、「ソロモン王は指輪をすると、あらゆる動物との会話が可能であった」という旧約聖書の話からつけられたものであるが、動物行動学の本である。当時、生物学では、遺伝学、生化学が華々しく発展していた時期であり、日本では行動学はまだ学問として認められていなかった。さまざまな動物の観察をもとにした話が書かれているが、特に、コクマルガラスの行動やハイイロガンのヒナが初めて見る動くものを自分の母親と思うという「刷り込み」（imprinting）という概念など、遺伝学や分類学などと大きく異なる見方に新鮮さを感じたことを覚えている。ちなみに、この本を読んでから四年後に、ローレンツはノーベル生理学・医学賞を受賞している。

授業が再開されてからは、一年以上の遅れを取り戻すべく、過密講義が始まり、通常より六カ月遅れて一〇月に農学部農芸化学科に進学した。駒場の生研では、さまざまな生物を研究対象としている少し変わった人物が集まっていた。筆者は、そこで高校生まで好きだった虫から、鳥、植物、最後は人間観察まで、二年半にも及ぶ長い駒場生活でいろいろな生物の観察をすることに没頭した。そのため、農学部に進学してからは、これまでの対象と異なる生物として、微生物を専門とすることにした。卒業後は、醸造試験所で清酒酵母と麹菌を対象とした研究を行い、その後、大学に戻り、現在は、麹菌の分子生物学を研究対象としている。先年、国際学会でローレンツが住んでいたウィーンを訪れ、自然史博物館の前で遊んでいるコクマルガラスと初めて出会った。そのとき、この本のことを思い出して、懐かしさを感じるとともになぜかとても豊かな心持ちになった。若いころ読んだ本は、年を経ても色あせることなく、記憶の底に密かに息づいているようである。

（二〇一一年一〇月一一日号）

〈執筆者紹介〉

一九七二年農学部卒業。博士（農学）。国税庁醸造試験所主任研究員等を経て、一九九六年より現職。専門は発酵醸造学、微生物生理学、分子細胞生物学。主要著作に、『バイオテクノロジーのための基礎分子生物学』（共編著、化学同人、二〇〇四年）、『改訂版 分子麹菌学』（編著、日本醸造協会、二〇一二年）など。